
愚神

鳶之はつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚神

【NZコード】

N3467F

【作者名】

鷺之はつき

【あらすじ】

カズマは姪のスズ力を引き取つてから6年が過ぎた。ある日二人はなぞの女性と出会い、それを期に二人の生活に不穏な影が漂い始める。カズマは6年前の父親と姉の死が関わっていると考え、二人の死の真相を探っていく。

それは父と姉が死んでから6年目の命日に始まった。

6年前、父と姉は死んだ。原因是交通事故で、姉が運転する車が雨に濡れた道路でハンドルをとられスリップし横転、炎上したらしい。

当時16歳だった僕は一人の確認をした。

もつとも、火葬前に黒焦げになつた二人は生前の面影なんてみてれるわけもなく、焼け残つた細かな遺品から父と姉であるとビックリ受け入れきれない思いのまま確認をした。

母は自分を生んでもすぐに亡くなつたと聞いている。

つまり、父と姉が僕に残された家族だったのだ。

こうして僕は一人きりとなつたわけだが、一人の最後がああいつた形であつただけに悲しいとかいった感情は不思議なほどに起こらなかつた。

幸い父がなんだかえらい研究をしていて、その道ではかなりの実績があつたようで、生前の蓄えや保険なんかで大学を出るぐらいまでなら十分に生活できそうだったので、ひとまず僕に関しては親族にもめ事を起こさずに済んだ。

一方で起きたのが、姉が残した子供についてだつた。

姉に子供が居たことを弟である自分もこの時初めて知つたぐらいだから、当然父親が誰かなんて分かるはずも無かつた。

その子供、当時4歳だったスズ力を親戚一同敬遠し誰も引き取つて面倒見ようとは言わず、変な緊張感が漂つていた。

放つておけば彼女は施設に送られる事となつたのだろう。

「その子を、僕に引き取らせていただけませんか……？」

いくら金はあっても今後に全くの不安が無いわけではないのに、思わず言葉が出ていた。

「カズマ君はまだ16歳でしょ。」

「学校だから無理に決まってるじゃない。」などと大人たちは考えを改めると口々に言つた。

「その子は僕の姪ですから。」

そして僕は危うくば血縁すら無いかもしない彼女を引き取る事となつた。

＝＝＝＝＝

あれから6年、僕は姪を連れて一人の墓を訪れた。
毎月の月命日にも訪れるが、この日は特別正装して行くのが6年
間何となく守られてきた決まりだ。

墓は公園のような日当たりのいい靈園にある。

母が亡くなつたとき、生前明るく輝かしかつた彼女が鬱蒼とした
くらい場所に一人きりでは可哀想だと言つて父がこの場所を選んだ。
靈園は奥に行くほど一軒ごとに与えられる敷地が広くなつていく。
うちの墓はわりと奥の方にあって、敷地内にいくつか花が植えられ
ている。これも父が母を思つての事だった。

灰がかつた白い石畳の道を三人の眠る場所に向かつて歩いていく
と、うちの墓の前に女性がしゃがみこんでいるのが見えた。

「カズ君あの人だれかなあ？」

スズカもまた気が付いたようで、少し不安げに聞こえる声でそう言
つて手を握つてきた。

僕達はその女性が終えるまでその場で待つていた。
しばらくして、女性はゆっくり立ち上がるといひうに向かつて歩き
だした。

その姿を見て僕は最近見た映画を思い出した。

近代ヨーロッパが舞台のその映画の中で、恋人を亡くした女性が
着ていたような黒いドレスをこの女性も着ていたからだ。

僕は、女性に馴染んではいるものの、どこか場違いな空氣も感じ

るその姿にしばらぐみとれた。

頭から黒いベールをかぶっていたため、はつきりと顔を見ることができなかつたが、やはり見覚えの無い女性だ。

互いにすれ違ひざまに田札をかわす。その時女性は確かに僕にささやいた。

「……はじめましてカズマ。」

驚いて振り返つたが、女性はそのまま優雅がな足取りで歩いていつてしまつた。

「カズ君早く行こつよー。」

痺れを切らしたスズカの声で僕は我に返った。

スズカは怒つているとも泣き出しそうともいえる顔で僕の上着の袖をつかみながら、その場で体をゆすつたり足踏みしている。

「ああ、そうだね…。」「

「はやくママたちに挨拶しないとママ待ってるよー。」

スズカは僕の手を乱暴に引っ張つて進んでいく。なんだか可笑しくて、先程まで僕の頭を支配していた彼女はどこかへ消え去つていた。

墓の前には女性が置いていったのだろう。色鮮やかな花束が左を頭にして置かれていた。

スズカはその花束を見て綺麗だとはしゃぎ、最後に自分達が買つてきたものも負けないと誰に向けてなのか言った。
そんな姿にも僕は微笑ましく思つてしまふのだった。

「カズ君お花ちょうだい。それからお水もあげてね。」

僕は言われるままに花を渡し、墓石に水をかけた。

最後に線香を供えて、墓参りは終わる。

墓の前で一人並んで手を合わせた。それが終るとスズカはつきつきした様子でまた僕の手を引っ張る。

「カズ君、お腹空いた。」

時刻はもう正午過ぎだった。

墓参りに来た後は、いつもスズカのお気に入りの店で食事する事も、なんとなくまもられてきた決まりなのだ。

靈園を出てから車を走らせてしばらくしたところにあるオープンテラスのイタリア料理の店が最近のスズカのお気に入りだ。落ち着いた雰囲気のその店が気に入るなんて、この小学生は案外ませているのかも知れない。

その後もスズカの指示する場所を点々として、夕食まで外ですませてしまった。

翌日、休日は朝の仕事はスズカに任せて僕は朝と昼の間くらいまで眠るか自室で休んでいる。スズカも気を利かせて、普段なら僕を起こすようなことはしないのだが……。

「カズ君　……」

僕を呼ぶスズカの声が階段下から忙しく何度も聞こえてくる。仕方なく下へ降りると、階段下に来ていたスズカはあと数段残た僕の手をつかんで引っ張つていった。

「どうしたんだよ。危ないだろ。」

危うく踏み外す所だったので思わず口に出したが、スズカには聞こえないようで、リビングのドアを開けると、テレビの前まで僕を引っ張ると必死になつて画面を指した。

「見て！この人昨日お墓に来てた人だよね？」

美しく整った顔立ちに、目蓋が重そうな目をしたその女性は、先日来日したオペラ歌手のエレン・ハーベルだった。

華奢な体からは想像もつかないような声量と、幅広い音域を操る彼女の歌声は世界中で高い評価を受けている。

そんな人物が自分達の家族と関係あるわけがないだろうと、スズカの言葉を否定するが、スズカは絶対にそうだと黙りつゝて意見を曲げる気配が無い。

「墓に来ていた女性は頭からベールを被っていたじゃないか、それでもスズカはその人の顔を覚えてるのか？」

少しめんどくさく思う気持ちが表れてしまったのか、どこか不機嫌そうに僕は言った。

するとスズカは頬を膨らませ負けじと言い返す。

「違うよ！ 私だって顔は見えなかつた。だけどエレンがしてる指輪と昨日の女人人が着けてたのと同じ何だもん！」

そして、見ていろといわんばかりに僕の腕をつかんだままテレビ画面とにらみあつた。

僕も仕方なしにその場につつ立つたまま画面に目を向ける。

すると、画面のエレン・ハーベルが前髪を指先で撫でるように触つた。確かにその指にはたくさんの指輪がはめられていて、特に中指にはめられた二匹の蛇が指に巻き付いている。デザインの指輪が目を引いた。

おそらくスズカもこの指輪をさしているのだね。

やつぱり指輪をしていると得意気だが僕は女性が着けていたところを見ていなかから何とも言えない。

しかし僕はすぐにスズカと意見を同じにした。

取り囲む報道陣から投げ掛けられる質問に全て首をふったり、頷いたりして答えていたエレンだったが、ある質問に対し声を上げて答えたのだ。

虚うな響きだがはつきりとしたその声は、確かに僕にあの日の女性を思い出させ、彼女が囁いた言葉が再び耳に響いた。

一瞬にして混乱の渦にのまれていく自分。それに気付いたのかスズカは僕の名前を呼ぶ。

ひとまず僕はすべてに蓋をしてスズカにむかって言つた。

「 そうかもしれないけど、やっぱり違ひんじやないかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3467f/>

愚神

2010年10月9日23時11分発行